

南海の楽園サモア

ポリテクセンター滋賀 岩崎 義一

1. はじめに

1987年3月より1989年3月まで、国際協力事業団派遣専門家としてマレーシア国CIASTプロジェクト、1994年4月より1997年4月まで、国際協力事業団個別派遣専門家としてサモア（1997年に西サモアよりサモアに国名変更）のポリテクニクに派遣されました。

高度経済成長の始まる前夜のマレーシアと、南太平洋の孤島サモアという全く状況の違う経験をさせていただきました。

異文化社会での貴重な体験の一例として、サモアにおける国際協力について 報告したいと思います。

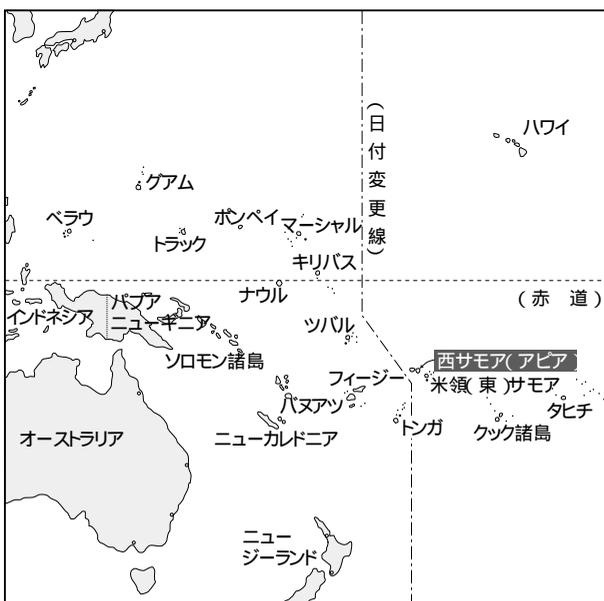


図1 サモアの位置

日本でサモアの話をする時、場所の説明からしなければならぬほど、なじみの薄い国ですが... (図1)。

サモアから見ると主要援助供与国となっています (表1)。無償資金協力として、学校、病院、空港、地方電話網、サイクロン対策用堤防等を建設し、生活の向上に貢献しています。

一方、有能な人材を養成するために専門家、シニアボランティア、青年海外協力隊の方々が、いろいろな分野に派遣され、人づくりのために、それぞれの立場で貢献しています。

表1 日本のODA

1. わが国の援助実績	95年度	95年度までの累計
	①有償資金協力	なし
	②無償資金協力	139.50億円
	10.92億円	47.28億円
	4.73億円	
2. 主要援助国	(百万米ドル, 94年, DACベース)	
	①日本 (22.7), ②豪州 (8.9), ③NZ (5.1)	
	二国間ODA計38.1	
二国間関係		
1. 政治関係	1980年6月8日, 在京西サモア名誉総領事館開設 1997年2月1日, 在アピア名誉総領事を任命	
2. 経済関係	①対日貿易 (96年, 通関統計)	
	(イ貿易額)	
	輸出	22百万円
	輸入	2,590百万円
	(ロ主要品目)	
	輸出	革製品, 木材, 綿織物等
	輸入	電気機器, 機械類, 工具類, 自動車等
	②わが国からの直接投資	
	12件	17百万米ドル (51~94年度累計)
3. 文化関係	教育振興計画, 移動図書館車, スポーツ用器材等 無償資金協力を実施	
4. 在留邦人数	105名 (96年10月現在)	
5. 在日サモア人	78名 (94年末現在)	

2. サモアについて

2.1 赴任時

家族3人と120kgの荷物を持って、真夜中に小雨の降るサモア国際空港に到着し、街灯のない真っ暗な道を走り、人をたくさん乗せたトラックにたびたび追い越され、時々見えるのはジャングルだけといったわけで、「エライ所」へ来たな、というのが実感でしたが、家族の手前、一人強がっていました。

さすがに、中心地であるアピアに入ると、街灯、民家、レストランと見えてきて、安心しました。

無事ホテルに着き、風呂に入ろうとして蛇口をひねったところ、茶色のお湯が出てきたので、入る気がせず、シャワーだけで寝ました。

翌日、目覚めて窓からハイビスカスの真っ赤な花を見たときは、南国に来たという実感がわき、早速プールサイドに出かけ、椰子の木の下でサモア製のビール(VAILIMA)をのんびり飲みました。

赴任して5ヵ月の間に、家族全員、病気の洗礼を受け、サモアでの生活に十分耐えられるように、たくましくなりました。

2.2 生活

“マタイ”と呼ばれる家長を中心とした大家族が、“ファレ”と呼ばれる壁のない家に団結して生活するというシステムが社会の基盤となり、海に行けば新鮮な魚が捕れ、庭には、椰子の実、バナナなどの果実が自然に成長します。

また、日曜日には、正装して教会(キリスト教)に行き、仕事はしてはいけません。

マラリア、黄熱病等の伝染病はなく(デング熱があるくらい)、湿度は高いが、気温は30度前後、雨期のサイクロンの発生が唯一の災害源。

犬に縄をつけるという習慣がなく、町中に大きな犬がのんびりと散歩しているという環境の中で、神奈川県くらいの国土に、16万人が生活しています。

当然、治安に関しても良好で、東南アジアのように鉄格子で窓や出入り口をガードする必要はなく、日本のように、人のいる間は網戸だけで生活しています。

このようにまさに“地上最後の楽園”であり、日本の雑踏とした社会から比べると“夢の国”という印象を受けますが、他の途上国と同じように近代化の波が押し寄せ、車がほしい、きれいな服がほしい、酒が飲みたい、エアコンがほしいといった欲望を満たすことは、この国ではできないので、輸入に頼らざるを得なく、貿易は大赤字であり、各国の援助で成り立っている国でもあります。

生活の基本である衣食住を説明することで、生活状況を理解していただけたと思います。

まず衣ですが、男女とも、“ラバラバ”という腰巻を巻いて、上はティーシャツかアロハシャツ、足にはゴムスリッパという姿をよく見かけます。このラバラバというのがサモアの民族衣装で、学校の制服はラバラバです(写真1)。

また、裸足の人もよく見かけます。靴を履いている人はほとんど見かけません。小職は、学校ではポロシャツと長ズボン(蚊にさされるため)で、ゴムスリッパです。休日は長ズボンが短パンツに変わるだけで、着る物、履く物に気を使うことはありません(ゴルフもスリッパ、裸足でプレイしても怒られません)。

次に食ですが、大きなローカルマーケットがあり、新鮮な魚(サモア人もまぐろは刺身で食べます)、果実、野菜が購入できますが、白菜、ピーマン、にら等の日本食によく使われる物は手に入りにくく(朝の買い出しで捜し回って、やっと入手できるかどうかの状況です)、当然、納豆、豆腐などは手に入りません。



写真1 ポリテクニクの学生

日本人が100名程度（半分以上が青年海外協力隊員）で、そのうち家族で来ているのは、数家族だけという社会なので、当然、日本料理店はなく、子どものほしがるキャラクタ商品は手に入らないので、外国に買い出しに行かざるを得ません。

飲み屋は数件ありますが、どこも飲物を注文する度に現金を前払いするシステムで、JICA関連の人とたまに利用して、情報交換を行っています（夜遅くなると、酔っぱらいのけんかが頻発するので、適当な時間に帰らなければなりません。サモア人は大きいので、飲む量も桁が違います）。

日本のマンションのようなものはなく（エレベータが国全体で2カ所のみ）、一戸建て住宅が多いです。水道、電気はたまに止まりますが、生活には支障のない範囲です（国全体がのんびりしていますから）。

華やかなナイトスポットもカジノもなく、娯楽といえば、入会金、年会費あわせて約27500円を払えば、いつでも無料でプレイできるゴルフ場が、時々ホテルで行われるサモアダンスショー、おかまショー（意外とおかまの多い国です）ぐらいです。ラグビーが盛んで、FW選手みたいな人がたくさんいます（腹の具合でも負けてしまいます）。

2.3 リゾート

南太平洋諸国の呼び物といえば海しかありません。サモアも他の観光先進国に負けないきれいな海を保有し、多くのビーチがありますが、自然のまま、観光客が来たらびっくりすることが多いです。例えば、トイレが汚いかまたはない、更衣室、シャワー室がない、蚊の大群に悩まされる、国際的ホテルがないといった具合です。

また、珊瑚にしても、何年か前に来襲した大型サイクロンで大きな被害を受け、死んでいる所が多く（最近、少し回復してきているということですが）、隣のフィジーの方が美しいと言われています。

しかし、それ故自動車で30分から1時間くらいの所で、自分たちのグループだけで、まるでプライベートビーチのように占有でき、バーベキューをして1日過ごせるという、日本では考えられない贅沢が



写真2 海中散歩

できます。

南太平洋への赴任が決まってから、密かにねらっていた、スキューバダイビングのライセンスを家内と共に取得することができました（写真2）。スノーケリングでも魚、珊瑚は見られますが、水深10～20mで見る世界は、また違った感じですよ（怖いのは、鯨の出現と減圧室がないので、減圧症にかかる治療のため、海の中に何時間もいなければなりません）。

3. 教育制度

就学年齢は5歳から始まり、大規模な国家試験が3回（Year 8 : National Examination, Year 12 : School Certificate, Year 13 : Pacific Senior Secondary Certificate）行われます（図2）。最終的には、Pacific Senior Secondary Certificateの成績優秀者がサモア国立大学の大学予備課程へ進学し、その修了試験の成績によって、進路が決まります。海外の大学（オーストラリア、ニュージーランド、フィジー）へのスカーラーシップを得るために、激しい受験戦争が展開されます。

大学はサモア国立大学（文学、教育学、会計学、大学予備課程）、南太平洋大学（フィジーに本部があり、南太平洋各国に分校を設置しており、当国には農学部が設置されている）があります。

職業能力開発施設は、教員養成学校、看護婦養成学校、ポリテクニク、青年教育訓練センター（キリスト教系の技術学校で、職種として自動車科、機械科を設置）があります。

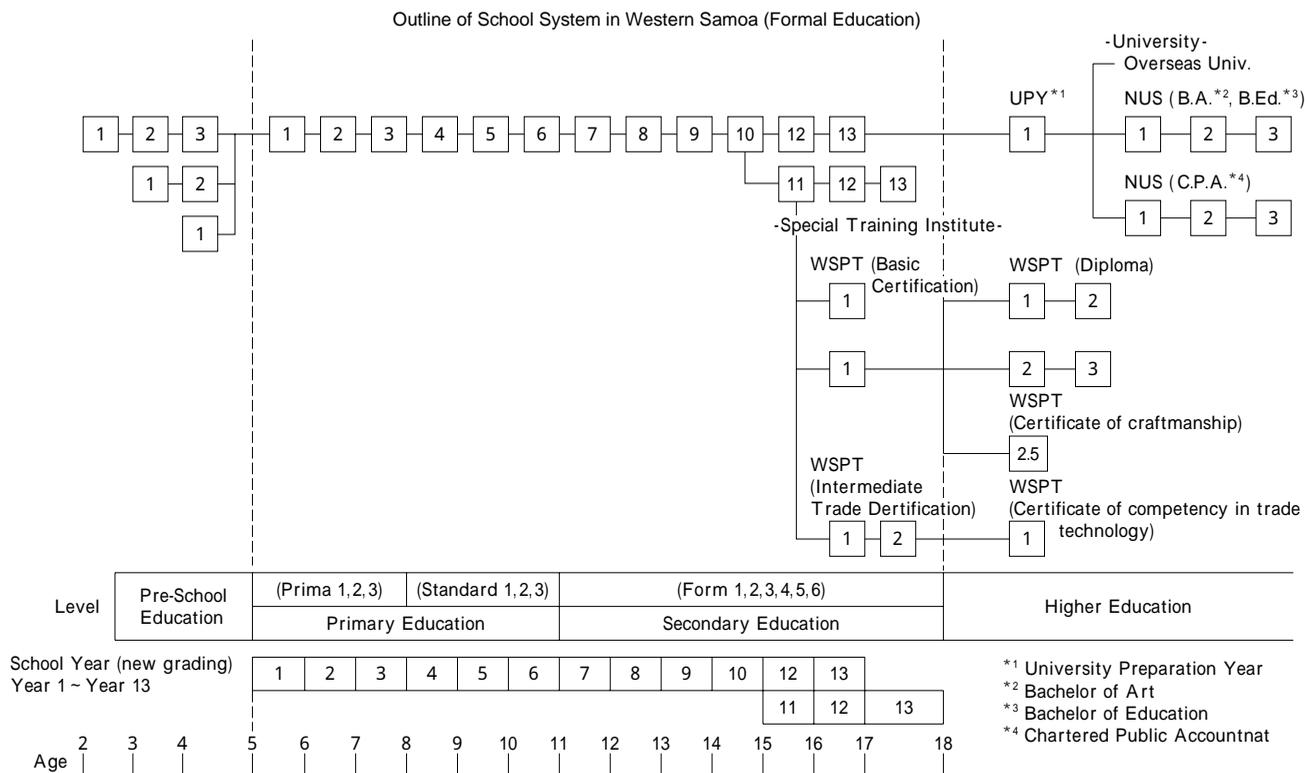


図2 教育制度

4. ポリテクニクへの協力

4.1 事業内容

1963年創立された、サモア最大の職業能力開発施設です。政府も技術教育訓練施設の拠点となるように力を入れており、具体的な改革計画を持っており、少しずつではあるが、拡大の方向にあります。現在、常設の10科で運営されています。

4.2 協力の背景

自動車整備科への協力として、個別派遣専門家が1991年4月から1996年6月に派遣されています。また1993年度単独機材供与にて自動車整備関連機器（約3000万円）を供与しているので、自動車整備機器については、サモアでは一番充実しています（車検制度の導入への参考機材となっている）。

私の所属した無線・電子科への協力については、「増加の一途をたどる電器製品等に対し、維持・補修の対応ができない状態であり、この分野での技術移転をすることにより、人材養成に資することとなり、

またこの国の経済社会の発展に貢献することができる」というサモア政府の要望に基づいて、個別派遣専門家として、派遣されました。

なお、第三国の協力としてオーストラリア、ニュージーランドが分野を分けて協力しています。

4.3 無線・電子科概要

1992年より、YEAR13（日本の高校2年レベル）修了者を対象として、日本でいう短大レベルを目標としたディプロマコースとなり、教育訓練期間は2年間です（将来的には、デグリーコースに拡大する構想もあります）。

カリキュラムの特徴としては、現場実習として、5週間の企業実習と専門科目以外に英語、数学、コンピュータ（アプリケーションソフトウェアの使い方）を取り入れていることです。

4.4 活動内容

訓練ニーズを把握するための各種調査：教育制度、産業、当校マスタープラン。



写真3 実習風景



写真4 カウンターパートと筆者



図3 新聞記事

カリキュラムの改善：国の現状に合った教育訓練を実施することを念頭に置き、現状のカリキュラム（修理技術主体）を基調として、改善策を協議した。教材、設備の不足のために、講義主体にならざるを得なかったことを反省し、実学一体の教育を前面に押し出すことを基本方針として、1年次は基礎技術、2年次には修理技術、無線技術の習得を目的とする（写真3）

本校の所定の様式に基づいて、シラバス、訓練計画、レッスンプランの作成を指導および実施検証。

機材の改善：上記カリキュラムに合わせた教材、機材（工具類含む）の整備。

教育環境の改善：実学一体教育に合わせた環境整備。

電子科教員に対する技術移転：新カリキュラム

遂行に必要な技術、携行機材、単独機材供与機器の使用に関する技術。

4.5 単独機材供与引き渡し式

1996年11月29日に、ポリテクニクにおいて、1995年度の単独機材供与（基本計測実習・無線測定実習関連機器：約3000千万円）の引き渡し式がJICA所長、サモア国大蔵大臣、ポリテクニク理事長、企業関係者等の出席で行われ、テレビ、新聞で報道されました（写真4、図3）

5. おわりに

近代産業の基礎技術である電子分野の人づくりのために、1人目の専門家として派遣され、ポリテクニク無線・電子科の基礎を充実させるために、何もない状態（執務室もない）から、各種活動を通じて改善してきましたが、実習機材、建物の不足は、現地業務費の範囲で改善できるものでないので、新カリキュラムの十分な実施、評価ができませんでした。

小職の評価では、やっと1種類（ディプロマコース）の種をまき終えた段階と判断しています。

人づくりプロジェクトは、長い期間の中で、方向性を見失わないように、地道に遂行していかなければなりません。

マレーシアのときと同様に、サモアにおいても、多くの人との出会いの中で、私自身が任国によって育てられたとサモアに感謝いたします。